

坂口由美子著「ビギナーズ・クラシックス、日本の古典、枕草子」

角川学芸出版 2004年7月25日刊を読む

春はあけぼの - 王朝の四季絵巻をひもとけば -

1. (1) 春は、なんといってもほのぼのと夜が明けるとき。だんだんとあたりが白んで、山のすぐ上の空がほんのりと明るくなって、淡い紫に染まった雲が細くたなびいているようす。
- (2) 夏は、夜がすてきた。月が出ていればもちろん、闇夜でも、ホテルがいっぱい飛び交っているようす。また、ほんの一つ二つ、ほのかに光っていくのもいい。雨の降るのも、また、いい。
- (3) 秋は、夕暮れ。夕日が赤々と射して、今にも山の稜線に沈もうというころ、カラスがねぐらへ帰ろうと、三つ四つ二つなど思い思いに急ぐのさえ、しみじみと心にしみる。まして、カリなどで列を連ねて渡っていくのが、遙か遠くに小さく見えるのは、なかなかにおもしろい。すっかり日が落ちてしまって、風の音、虫の音などがさまざまにかなでるのは、もうことばに尽くせない。
- (4) 冬は早朝。雪が降り積もっているのはもちろんのこと、霜が真っ白に降りているのも、またそうでなくても、はりつめたように寒い朝、火などを大急ぎでおこして、炭火を部屋から部屋へ運んでまわるのも、いかにも冬の早朝らしい。昼になってだんだん寒さが緩むと、火鉢の炭火も白く灰をかぶってしまって間の抜けた感じた。
2. (1) 春は、曙。やうやう白くなりゆく山際すこし明かりて、紫立ちたる雲の細くたなびきたる。
- (2) 夏は、夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛩の多く飛び違ひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。雨など降るも、をかし。
- (3) 秋は、夕暮れ。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥の、寝所へ行くとして、三つ四つ二つなど、飛び急ぐさへ、あはれなり。まいて、雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた、言ふべきにあらず。
- (4) 冬は、早朝。雪の降りたるは、言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、炭櫃・火桶の火も白き灰がちになりて、わろし。

3 . (1) 春秋の優劣や、春は桜、秋は月といったことは古くからいわれているが、清少納言^{せいしょうなごん}の歯切れのよい筆は、四季の新しい美しさを立体的に描き出した。春の曙の雲の、刻一刻変わっていく色合い。夏の夜の幻想的な蛍の光。夜半ふと気づいた雨の音。ふだんは嫌われもので不細工な鳥も、人恋しい秋の夕暮れにはしみじみと哀れを誘う。秋の夜長に耳を澄ませば、風の音と虫の音はさながらコンツェルトを奏でるようだ。冬は日だまりの温もりかと思いきや、一転、凍てつく寒さの中できびきびと働く人々の姿を描き出す。とくに、冬の寒気が緩むのを「わろし」と言い切るところに、王朝の才女の五感の鋭さが表れている。

(2) 清少納言はその才を買われて、一条天皇の中宮(=最高位の妃)定子(藤原道隆^{ふじわらみちたか}の娘)に仕えた。当時、貴族はこぞって娘を天皇の夫人としてさし出し、娘が天皇の寵愛^{ちようあい}を得ることによって、政治権力をつかもうとしていた。そのため、娘のもとに、才能のある貴族の女性を女房(=侍女)として集め、洗練された文化サロンを作る必要があったのである。

(3) 定子の父道隆の没後、一条天皇の後宮では藤原道長^{みちなが}の娘彰子^{しょうし}が力をもつようになるが、この彰子に仕えたのが、『源氏物語』の作者、紫式部^{むらさきしきぶ}であった。

4 . 『枕草子』第一段について

(1) 第一段は、古来、名文として名高い。その名文たる所以^{ゆえん}はどこにあるのか。一言で言うならば、それは、絶え間ない変化であり、際立った対比であろう。

(2) 文の構造は、春夏秋冬の四段に分かれる。「春の曙」と「秋の夕暮れ」は和歌の伝統であり、「夏の夜」と「冬のつとめて」はそれまで顧みられなかった新しさである。各段冒頭の一文は体言止めで統一される。それぞれの情趣に対する評価は、春は何もなく、夏は「さらなり」「をかし」、秋は「あはれなり」「いとをかし」「言ふべきにあらず」、冬は「言ふべきにもあらず」「いとつきづきし」「わろし」である。繰り返しつつしだいに変化し、最後にのみ「わろし」という転調が来て一気に終わる。

(3) この構造の中で時間は春から冬に流れるが、同時にそれぞれの段の中では、例えば、「つとめてから昼」というような別の時間の変化がある。そして視点も、自然から人事へと変化する。

(4) また、さまざまな対比が行われる。「曙」と「夕暮れ」、「夜」と「つとめて」、「ただ一つ二つ」と「三つ四つ二つ」、「月」と「闇・雨」、蛍は「多く」と「ほのか」、「山際」と「山の端」、「鳥」と「雁」。「鳥」と「雁」はまた、視覚的なものとして、聴覚的な「風の音・虫の音」と対比される。「雪・霜(白)」と「炭火(黒・赤)」、「視覚」と「聴覚」と「皮膚感覚」。

(5) この第一段は約四百字にすぎない。その中に、これだけの変化と対比が織り込まれている。さらに、全体に一貫した動機がある。光と色である。光は「すこし明かりて」「月光」「闇」「蛍」「夕日」「雪明かり」「炭火」「昼光」。色は「紫」「黒」「赤」「白」。

(6) ここに挙げたことはそのまま、『枕草子』という作品全体についていえることでもある。

5. 『少年少女古典文学館 4 枕草子』大庭みな子 講談社

百十六段を取り上げてあり、『枕草子』の全貌ぜんぼうがよく分かる。子供向けではあるが、正確で美しい現代語訳。挿絵も豊富で注・解説も分かりやすい。

- (1)春はなんといっても明け方。だんだん白んでくる山際が少し明るくなって、紫がかった雲がほそくたなびいているさま。
- (2)夏は夜。月があればもっとよい。闇の夜でもほたるがいっぱいとびかうさま。また、ほんの一つ二つ、ほのかに光ってとぶのもよい。雨のふるのもまたよい。
- (3)秋は夕ぐれ。夕日が山際に近づいて、からすがねぐらに帰るのか、三つ四つ、二つ三つといそぐさまもなんともいえずよい。列をつらねてとぶ雁がはるかかなたに小さく見えたりするとしみじみとする。日がすっかりしずみ、風の音、虫の音のかなでのおもしろさは、いうまでもない。
- (4)冬は早朝。雪がふりつもったら、なおさらだけれど、霜のまっ白におりた朝もよい。そうでない朝でも、たいそう寒いなかを、火などいそいでおこして炭を持ちほこぶさまはいかにも冬らしい。昼になっていくらか寒さもゆるみ、火ばちの炭火が白く灰になるころはわびしい。

6. 『桃尻語訳 枕草子』上・中・下 橋本治 河出書房新社

清少納言の語り口調で、一見破格で驚くが、実は丁寧な全段の逐語訳。注も非常に詳しく、服装や調度、官職など今まであいまいだったことがはっきりする。

(1)春って曙よ！

だんだん白くなってく山の上の空が少し明るくなって、紫っぽい雲が細くたなびいてんの！

(2)夏は夜よね。

月の頃はモチロン！

闇夜もねエ…。

蛍が一杯飛びかっているの。

あと、ホントに一つか二つなんか、ぼんやりポーッと光ってくのも素敵。雨なんか降るのも素敵ね。

(3)秋は夕暮ね。

夕日がさして、山の端にすごく近くなったところにさ、烏が寝るところに帰るんで、三つ四つ、二つ三つなんか、飛び急いでくのさえいいのよ。ま・し・て・よね。雁なんかのつながったのがすごく小さく見えるのは、すごく素敵！日が沈みきっちゃって、風の音や虫の声なんか、もう……たまんないわねッ！

(4)冬は早朝つとめてよ。雪が降ったのなんか、たまんないわ！

霜がすんごく白いのも。

あと、そうじゃなくても、すごく寒いんで火なんか急いでおこして、炭の火持って歩いてく

のも、すっごく“らしい”の。昼になってさ、あったかくダレてけばさ、火鉢の火だって白い灰ばっかりになって、ダサイのッ！

P234 ~ 237

[コメント]

日本の古典についてもわかりやすいテキストがどんどん出版されている。これほどうれしいことはない。カバンやポケットに古典をいつも1～2冊入れて大いに親しもう。

- 2009年12月15日 林明夫記 -